女子大國文　第百七十一号　令和四年九月三十日

二〇二一年度公開講座

平安時代の柿本人麿

藤田洋治

この度、京都女子大学の公開講座を担当させていただく光栄をよろこんでおります。学生と市民の皆さんが参加してくださるとのことですので、細かな専門的なことではなく、文化史としての人麿像の変遷を話すことにしました。その際の口頭での話をそのまま掲載していただくのは、あまりに恥ずかしいことですので、書き言葉で掲載させていただきます。新型コロナの流行で一年延期となりまして、教授で承った話が、肩書きが「個別任期付教授」となってしまいました。

はじめに

柿本人麻呂といえば、万葉集を代表する歌人であり、さらに言えば、万葉集第二期を代表する荘重な歌風で知られている万葉集や日本を代表する歌人と位置づけることができる。万葉集で見れば、持統・文武朝を中心に活躍してお

り、万葉集の中でも既に大伴家持の書簡で「山柿の門」と記されていて、優れた歌人と認識されていたことが窺えるが、平安時代には「歌の聖」とされ、さらに「歌の神」にまでなってしまうのである。

その人麿を平安時代、特に古今和歌集（以下、勅撰集は「和歌」を省略する）から拾遺集の時代にかけての頃、西暦九〇〇年代から一〇〇〇年頃に焦点を当てて考察していきたい。既に片桐洋一氏『柿本人麿異聞』[1]で触れられていることであるが、視点を変えて考えてみたい。

まず歌人名であるが、万葉集では柿本人麻呂と書かれ、平安時代以降は、名を人麿と表記されることが多い。「麿」は、「麻」と「呂」を一字化した国字で、音読みのない漢字である。さらに、「麿」は画数が多いので、より画数の少ない「丸」を用いて、人丸とも表記されることもある。この中では平安期に通行していた「人麿」で表記していきたい。

一、人麿像と歌神としての人麿

まず次の絵を見てほしい。一人の老人が浜辺で沖の船を見ているものである。

絵は、『あづまかゞみ』（天保四年（一八三三）・須原屋茂兵衛版）のものを用いたが、平安時代以降、人麿の代表歌とされる「ほのぼのと明石の浦の朝霧に島がくれゆく舟をしぞ思ふ」とその歌意図、そして人麿像（歌仙絵）である。人麿像が老人となっている理由は、次のような説話による。『十訓抄』（四ノ二）の話である。藤原兼房（一〇〇一～一〇六九）が和歌を好むが、いい歌が詠めず、人麿を念じていた。ある日の夢に梅の花ばかり雪のように散る中に老人がいて、人麿を常に心に掛ている、深甚なことだと言って、さっと消えた。朝に絵師を呼んで、何度も書き直させて、似ているものを宝にした後、よい歌を詠むことができるようになった。後にその絵を白河院に献上し、宝蔵に

納められた。藤原顕季（一〇五五～一一二三）が何度も願い出て借り出し、絵師に書き写させ、そこから人麻呂影供が始まったとされる。

このことから、歌仙絵に描かれる人麿像は、白髪の老人とされ、平安末期写の『佐竹本三十六歌仙絵』（国宝）以降、ほとんどすべての歌仙絵、百人一首絵、三十六歌仙絵では、白髪の老人に描かれることになった。また、この話から、「人麿影供」ということが始まった。古今集で「歌の聖」とされた柿本人麿が、歌神として意識されるようになり、元永元（一一一八）年に、藤原顕季が人麿画像供養と歌会を合体させた人麿影供を創始する。以降、多くの歌人がそれにならい、鎌倉時代には、『影供歌合』も行なわれ、後鳥羽院、順徳院も行なうようになり、鎌倉後期頃には特に「影供」と意識せずに歌会で人麿画像を掛けるのが一般化し、江戸末期まで続いた。結果的に人麿は、歌人というよりも歌聖であり、また歌神として長い間存在し続けたの

である。

二、古今和歌集と人麿

著名な話であるが、古今集の仮名序には、次のような記述が見える。

古よりかく伝はるうちにも、平城の御時よりぞ広まりにける。かの御世や歌の心をしろしめしたりけむ。かの御時に、正三位柿本人麿なむ歌の聖なりける。これは、君も人も身を合はせたりといふなるべし。秋の夕、龍田河に流るる紅葉をば、帝の御目には錦と見たまひ、春の朝、吉野の山の桜は、人麿が心には雲かとのみなむ覚えける、また、山辺の赤人といふ人ありけり。歌にあやしく妙なりけり。人麿は赤人が上に立たむことかたく、赤人は人麿が下に立たむこと、かたくなむありける。(2)

真名序では、人麿について「先師柿本大夫」と記される。仮名序で「正三位」と、真名序では「大夫」と称されているのである。人麿は大納言レベルであったのかと疑問視されるところであるが、同じ古今集には、撰者の一人、壬生忠岑が長歌で人麿に触れている。一〇〇三番歌で、「古歌に加へて奉れる長歌」という詞書で次のように詠む。

1003 呉竹の　世世の古言　なかりせば　伊香保の沼の　いかにして　思ふ心を　述ばへまし　あはれ昔べ　ありきてふ　人麿こそは　うれしけれ　身は下ながら　言の葉を
天つ空まで　聞こえあげ　末の世までの　あととなし　今も仰せの　下れるは
塵に継げとや　塵の身に　つもれる言を　問はるらむ　これを思へば　いにしへに
薬けがせる　けだものの　雲にほえけむ　心地して　千々の情けも　思ほえず

一つ心ぞ　誇らしき　（以下略）

と、人麿を「身は下ながら」と決して高官ではなかったと認識しており、序文の表現がかなり大袈裟な虚構と見てもよいと思われる。

その古今集には、人麿の和歌は一首も採られていない。が、左注で「この歌は、ある人のいはく、柿本人まろが歌なり」などと記された歌は、何首か存在する。次の七首である。

題しらず　　よみ人しらず

135　わがやどの池の藤波さきにけり山郭公いつかきなかむ

このうた、ある人のいはく、かきのもとの人まろがなり

（題しらず　　よみ人しらず）

211　夜をさむみ衣かりがねなくなへに萩のしたばもうつろひにけり

このうたは、ある人のいはく、柿本の人まろがなりと

（題しらず　　よみ人しらず）

334　梅花それとも見えず久方のあまぎる雪のなべてふれれば

この歌は、ある人のいはく、柿本人まろが歌なり

409 （題しらず　よみ人しらず）
ほのぼのと明石の浦の朝霧に島がくれ行く舟をしぞ思ふ
このうたは、ある人のいはく、柿本人麿が歌なり

621 （題しらず　よみ人しらず）
あはぬ夜のふる白雪とつもりなば我さへともにけぬべきものを
この歌は、ある人のいはく、柿本人麿が歌なり

671 （題しらず）　よみ人しらず
風ふけば浪打つ岸の松なれやねにあらはれてなきぬべらなり
このうたは、ある人のいはく、かきのもとの人まろがなり

907 （題しらず　よみ人しらず）
梓弓いそべのこ松たが世にかよろづ世かねてたねをまきけむ
この歌は、ある人のいはく、柿本人麿がなり

全て「題しらず・よみ人しらず」の和歌である。この左注は、正しいのか、古今集の当初から存在したものか、後に書き加えられたものか。仮名序の注に平兼盛の和歌が見られ、後人のものと見られるのだが、左注を古今集の時代

には存在しなかったというのは、片桐洋一氏[3]で、古今集四一二番歌の左注と、撰者の中心人物・紀貫之の『土佐日記』の記述に矛盾があることなどを根拠に、左注は古今集ができ上がってからほぼ百年後頃に書き加えられたとしているのに従いたい。

当時行なわれていた「歌語り」、歌語りを簡単に言うならば、歌に関わって口承で語られる話で、「歌語り」という言葉は源氏物語や枕草子などに見えている。その口承の歌語りが伊勢物語や大和物語のような歌物語を生み出す基盤となったものと考えられ、平安時代だけでなく、既に万葉集の時代からあったことがわかっているものである。そのような歌語りや伝承の中で、人麿の和歌だと伝承されていたものであろう。古今集の仮名序でも平城（なら）の帝と人麿が「身を合はせたり」とおそらく歌語りに基づいたと思われる話が記されている。

ここで、既に万葉集の人麻呂像から乖離した人麿像が見えるのである。人麿は、歌の聖であり、平城の帝とともに活躍し、古今集の七首に「よみ人しらず」として入集した名歌の作者という伝承の歌人となったのである。

三、藤原公任周辺の万葉歌

次に、三舟の才で知られる藤原公任の著作を見てみたい。古今集の次に編纂されたのが後撰和歌集で、その編纂と併せて行なわれたのが万葉集の訓読作業であることはよく知られたことである。後撰集と万葉集との関連についての論考も多いが、人麿に焦点を当てるという目的から、公任の著作に注目することにしたい。

公任は、四条大納言とも称され、『金玉集』、『如意宝集』、『和歌九品』、『和漢朗詠集』、『拾遺抄』など、多くの歌集・秀歌撰や歌論書を著した歌学者、歌人である。著作の成立順に見て行きたいところであるが、成立時期が全てが明確ではないので、幾つか採り上げてみたい。

まず、公任撰の『金玉集』（全七六首）には、二首の人麿歌が収録されている。

冬　　人丸

33　龍田川紅葉ながる神なびのみむろの山にしぐれふるらし

雑　　人丸

47　ほのぼのとあかしのうらのあさぎりにしまがくれゆくふねをしぞ思ふ

33番歌は、古今集二八四番歌で、よみ人しらずであるが、拾遺集二一九番歌では、柿本人麿歌として入集している。拾遺集で重出するのは、古今集における「よみ人しらず」を訂正する意図があったものと推測される。47番歌は、古今集四〇九番よみ人しらず歌で、左注「この歌は、ある人のいはく、柿本人麿がなり」が付せられた歌。公任は、自身の著『九品和歌』で、上品上に位置づけ、「是は詞たへにして余りの心さへあるなり。」として、壬生忠岑の「はるたつといふばかりにや」（拾遺集巻頭歌）とともに最も優れた歌と評価している。そして人麿の代表歌として平安期以降広く知られた和歌でもある。

次に、『三十六人撰』では、公任は次の十首を人麿の和歌として選出する。

一　昨日こそ年はくれしか春霞かすがの山にはや立ちにけり
（万葉集・十・1843）

二　あすからは若菜つまむと片岡の朝の原はけふぞやくめる
（拾遺集18　人丸）

三　梅花それとも見えず久方のあまぎる雪のなべてふれれば
（古今集・334不知・拾遺12人丸）

四　郭公鳴くやさ月の短夜も独しぬればあかしかねつも
（万葉集・十・1981）

五　飛鳥河もみぢば流る葛木の山の秋風吹きぞしくらし
（万葉集・十・2210）

六　ほのぼのと明石の浦の朝ぎりに　島がくれ行く舟をしぞ思ふ
（古今集・409不知）

七　たのめつつこぬ夜あまたに成りぬれば　またじと思ふぞまつにまされる
（拾遺集・848）

八　葦引の山鳥の尾のしだりをの　ながながし夜をひとりかもねむ
（万葉集・十一・2802或本）

九　わぎもこがねくたれがみをさるさはの　池の玉もと見るぞかなしき
（大和物語一五〇段）

一〇　物のふのやそ宇治河のあじろ木に　ただよふ浪のゆくへしらずも
（万葉集・三・264人麻呂）

以上の和歌のうち、人麿の実作と断定できるのは、一〇の「物のふの」の和歌一首だけであり、出典を下に略号で示した如く、万葉集巻十の歌が三首、巻十一の歌が一首、古今集歌が二首、そして拾遺集の和歌が二首である。巻十・

十一の万葉歌は、全て作者名のないものであり、古今集の二首もよみ人しらずの和歌に左注で人麿とされたものである。拾遺集の二首のうち、二「明日からは」は、人麿集[4]の他、三十人撰や三十六人撰などにも選出されており、公任自身が拾遺抄で人麿詠として入集させており、人麿の歌という認識がなされていたと判断され、七「たのめつつ」も、人麿集に収録されているだけではなく、公任撰の深窓秘抄・拾遺抄にも人麿の和歌として採録され、和漢朗詠集でも人丸という作者名注記が見えている。公任が人麿の和歌と認識していたことは疑いようがない。九「わぎもこが」の歌は、大和物語一五〇段において平城の帝とともに唱和したもので、これも人麿の和歌と判断されたのであろう。これらの和歌は、伝承や歌語りなどから人麿詠と判断されたものであろう。また、万葉集の和歌は、後撰集編纂事業とともに行われた万葉集訓読作業で訓みが明らかになった和歌の一部が、人麿の和歌として（推測となるが人麿集として編纂され）、人麿の和歌という認識がなされたと思われるものばかりである。なお、人麿集の成立時期については、後藤利雄氏[5]は、「拾遺集の撰者は歌仙本柿本集から人麿歌の大部分を採ったと思われ、従って拾遺集の方が歌仙本柿本集の後に成立したものであろうと推定されるのである。」としておられるところであり、拾遺抄の頃には、歌仙歌集本人麿集に類似した形態の人麿集が存在したと推測している。

四、拾遺抄の人麿歌

拾遺抄の人麿歌も、三十六人撰とほぼ同様の様相を示す。人麿歌九首と人麿歌の左注が付いている二首を示す。

夏　　題不知　　読人不知

① 80　時鳥なくや五月のみじかよもひとりしぬればあかしかねつも

此歌柿下人丸集にも入れり云云。

（万葉集・十・一九八一）

秋　題不知　人丸

② 93 としに有りてひとよいもにあふひこぼしの我にまさりておもふらんやぞ

（万葉集・十五・三六五七）

恋上　題不知　人丸

③ 246 ちはやぶる神のやしろもこえぬべしいまは我がみのをしげなければ

（万葉集・十一・二六六三）

（題不知）　人丸

④ 248 こひつつもけふはくらしつ霞立つあすのはるひをいかでくらさむ

（万葉集・十・一九一四）

（題不知）　人丸

⑤ 260 あさねがみ我はけづらじうつくしき人のたまくらふれてしものを

（万葉集・十一・二五七八）

⑥ 261 かくばかりこひしき物としらませばよそにぞ人をみるべかりける

（万葉集・十一・二三七二）

（題不知）　人丸

⑦ 272 湊入りのあしわけをぶねさはりおほみ恋しき人にあはぬころかな

（万葉集・十一・二七四五）

（題不知）　人丸

⑧ 281　あしひきの山より出づるつきまつと人にはいひて君をこそまて

（万葉集・十二・三〇〇二）

（題不知）　人丸

⑨ 284　頼めつつこぬよあまたに成りぬればまたじと思ふぞまつにまされる

雑下　さるさはのいけにうねべのみなげてはべりけるを見はべりて　柿本人丸

⑩ 555　わぎもこがねくたれがみをさるさはのいけのたまもとみるぞかなしき

（大和物語一五〇段）

冬　屏風のゑにこしの白山のかたをかきて侍りける所に　藤原佐忠朝臣

⑪ 149　我ひとりこしのこしぢをこしかども雪ふりにけるあとをこそ見れ

此歌柿下人丸集に有り。或本には三方沙弥がともはべり。

①から⑧までは、全て万葉集に見られる歌である。①はよみ人しらずの和歌であるが、左注で「柿下人丸集にも入れ

り」という注記が見え、人丸集（人麿集）がこの左注書き入れ時点で存在したことを示している。竹鼻績氏[6]は、例えば二六〇番歌に対し、「『万葉集』では作者不詳であるが、平安時代には人麿の歌とみられていたようで、『抄』『集』ともに人麿の作とあり、『人麿集』の諸本にもある」と解釈しているとおり、万葉集の作者不詳の和歌が人麿の和歌として認識されていたものであろう。また、②九三番歌について、同氏は、「作者は遣新羅大使の一行のひとりである。『万葉集』によると、遣新羅大使の一行は旅中で「当所誦詠古歌」とあるように古歌を誦詠したが、その古歌は人麿の歌であった。このような事から、作者不詳の三六五七も人麿の作とする伝承が生じ、それが流布して、『人麿集』『古今六帖』など作者を人麿とする文献が平安時代になって現れたのであろう」と推測している。人麿の伝承がこのように広がっていくのである。⑨は、三十六人撰で既に触れた和歌である。⑩は、奈良の帝とともに語られた歌語りが元になり、大和物語に収録されたものである。問題になるのは、⑪で、屏風歌でかつ作者名が藤原佐忠朝臣とある。屏風歌が万葉集の時代には存在するはずもなく、人麿の和歌とは考えられない。そして、次のような類歌が見える。輔尹集の和歌である。

東三条院の御賀屏風のゑに、こしのしらやまのかたかきたる、人の
のぼるさきに、また人のとほくゆく

59　われひとり入りにしこしのしらやまにゆきふりにたる人を見るかな

藤原輔尹と藤原佐忠はほぼ同時期の別人であり、輔尹の家集に、類歌が見えるのは、輔尹と佐忠とは名前がともに「すけただ」とであるために誤って収録されたものと推測される。したがって⑪は、人麿の歌とは考えられないし、人麿

集諸本にも見いだせない。

このような和歌を見ると、人麿歌の多くは、万葉集の和歌を、おそらく人麿集に収録されて、それを利用したものと考えられ、一方で人麿と奈良の帝との伝承があって、それからも採り込まれたと考えられる。

五、拾遺抄の万葉歌

このような人麿の和歌を見ていくと、拾遺抄は直接万葉集を資料としていなかったのかと、疑問に思われてくる。公任は、果たして万葉集を参考にしていなかったのだろうか。次の例である。拾遺抄の和歌に対応する万葉集歌を並べて示す。

（題不知）　中納言安部広庭

8　いにし年ねこじてうゑし我がやどのわかぎの梅ははなさきにけり

中納言阿倍広庭卿歌一首

1423　去年春　伊許自而殖之　吾屋外之　若樹梅者　花咲尓家里

こぞのはるいこじてうゑしわがやどの　わかきのうめははなさきにけり

拾遺抄八番歌は、万葉集に見られる歌である、万葉集は万葉仮名も併せて記したが、万葉集・巻八の阿部広庭の和歌を入集させていることが明らかである。次の例も同じである。拾遺抄三一六番歌は、万葉集・巻四の大伴像見の和歌

であり、ここでも作者名もが一致している。

（題不知）　大伴かたみ

316　いそのかみふるともあめにさはらめやあはんといもにいひてしものを

大伴宿祢像見歌一首

664　石上　零十方雨二　将関哉　妹似相武登　言義之鬼尾

いそのかみふるともあめにつつまめや　いもにあはむといひてしものを

このように、万葉集の和歌が拾遺抄に採録されていることは明らかで、公任は万葉集を資料として利用していたと考えられるのである。

しかし、次の人麿の和歌はいかがであろうか。同じように、万葉集を参考にしてみると、巻十一の万葉歌で、二首ともに作者不詳の和歌である。

（題不知）　人丸

260　あさねがみ我はけづらじ　うつくしき人のたまくらふれてしものを

261　かくばかりこひしき物としらませば　よそにぞ人をみるべかりける

2578　朝宿髪　吾者不梳　愛　君之手枕　触義之鬼尾

あさねがみわれはけづらじ　うるはしききみがたまくらふれてしものを

2372　是量　恋物　知者　遠可見　有物

かくばかりこひむものぞとしらませば　とほくもみべくありけるものを

作者が人麿とされる和歌は、このように万葉集では、作者未詳の歌なのである。これを人麿歌とするには、万葉集から直接採ったのではなく、人麿集が介在していたと見るのが妥当ではないだろうか。拾遺抄時代の人麿集が現存する人麿集と全く同じではなかろうが、現存本にも見られる和歌が多いことは確かであろう。

資料ばかりが続くが、万葉集歌をもう少し見ておきたい。和歌の後ろに万葉集の巻と歌番号、そして拾遺集の歌番号を載せておいた。

旅に思ひをのぶといふ心をよみ侍りける　（万葉集・巻・番号）　拾遺集番号

石上おとまろ

①　296　あしひきの山こえくれて宿からば妹立ち待ちていねざらんかも

（万葉集・巻七・一二四二）　781

題不知　赤人

②　297　わが背子をならしの山のよぶこどり君呼びかへせ夜のふけぬまに

（万葉集・巻十・一八二二）　819

（中略）

題不知　　読人不知

③ 300 やほか行く浜のまさごと我がこひといづれまされりおきつしまもり

（万葉集・巻四・五九六）

889 みちをまかり侍りてよみはべりける　おとまろ

④ 301 よそにありて雲井に見ゆるいもが家に早くいたらむ歩めくろ駒

（万葉集・巻七・一二七一）

910

① 1242 足引之　山行暮　宿借者　妹立待而　宿将借鴨

あしひきのやまゆきぐらしやどからば　いもたちまちてやどかさむかも

② 1822 吾瀬子乎　莫越山能　喚子鳥　君喚変瀬　夜之不深刀尓

わがせこをなこしのやまのよぶこどり　きみよびかへせよのふけぬとに

③ 596 八百日往　浜之沙毛　吾恋二　豈不益歟　奥嶋守

やほかゆくはまのまなごもあがこひに　あにまさらじかおきつしまもり

④ 1271 遠有而　雲居尓所見　妹家尓　早将至　歩黒駒

とほくありてくもゐにみゆるいもがいへに　はやくいたらむ歩め黒駒

右一首柿本朝臣人麿之歌集出

四首ともに、万葉歌であり、それぞれ①が巻七、②が巻十、③が巻四、④が巻七の和歌である。③が読人不知とあるのは、万葉集から採録したものであろう。一方、②は巻十の和歌であり、作者不詳であるが、赤人の作とされるのは、万葉集巻十の一部が山部赤人（平安時代は山辺赤人と表記する）の家集、赤人集から採録したためであろう。実際に、赤人集にはこの和歌が収載されている。ところで、①の「石上おとまろ」④の「おとまろ」は、同一人物と考えられるが、なぜこのような作者名となったのであろうか。

石上乙麻呂は、万葉集では第三期の人物で、左大臣麻呂の子、中納言宅嗣の父で、中納言に至った。注意されるのは、天平一一年（七三九）、藤原宇合の妻久米連若売との恋愛事件が発覚して、土左に流罪になったという事件を起こしていることと、その折の和歌が万葉集に見えることである。スキャンダルの主人公の名前が乙麻呂なのである。その事件に関わる乙麻呂の万葉集歌を掲げる。

石上乙麿卿配二土左国一之時歌三首并短歌

1019 石上　振乃尊者　弱女乃　或尓縁而　馬自物　縄取附　肉自物　弓笑囲而
王　命恐　天離　夷部尓退　古衣　又打山従　還来奴香聞

いそのかみ　ふるのみことは　たわやめの　まとひによりて　うまじもの
つなとりつけ　ししじもの　ゆみやかくみて　おほきみの　みことかしこみ
あまざかる　ひなへにまかる　ふるころも　まつちやまより　かへりこぬかも

1020 王　命恐見　刺並之　国尓出座耶　吾背乃公矣　繫巻裳　湯湯石恐石
住吉乃　荒人神　船舳尓　牛吐賜　付賜将　嶋之崎前　依賜将

礒乃埼前　荒浪　風尓不令遇　草管見　身疾不有　急　令変賜根
本国部尓

おほきみの　みことかしこみ　さしならぶ　くににいでます　はしきやし
わがせのきみを　かけまくも　ゆゆしかしこし　すみのえの　あらひとがみ
ふなのへに　うしはきたまひ　つきたまはむ　しまのさきざき　よりたまはむ
いそのさきざき　あらきなみ　かぜにあはせず　つつみなく　やまひあらせず
すむやけく　かへしたまはね　もとのくにへに

1022 父公尓　吾者真名子叙　妣刀自尓　吾者愛児叙　参昇　八十氏人乃
手向為等　恐乃坂尓　幣奉　吾者叙追　遠杵土左道

ちちぎみに　われはまなごぞ　ははとじに　われはまなごぞ　まゐのぼる
やそうぢひとの　たむけする　かしこのさかに　ぬさまつり　われはぞおへる
とほきとさぢを

反歌一首

1023 大埼乃　神之小浜者　雖小　百船純毛　過跡云莫国

おほさきのかみのをばまはせばけども　ももふなびともすぐといはなくに

流罪に際して乙麻呂自身が詠じた長歌、反歌としているが、詠みぶりからは事件を聞きつけた誰かが乙麻呂をからかうために詠んだものと思われ、事実『和歌文学大辞典』(7)では乙麻呂の項を執筆した梶川信行氏も「自身の作ではなく、

乙麻呂伝承の存在を伝えるものと見る説も有力である」と記している。この事件の記憶が、歌語りとして語り伝えられ、長い間に万葉集の別の和歌にこの事件が付加されてしまったと思われる。池原陽斉氏[8]は竹鼻績氏の考察を受け、さらに古今六帖の乙麻呂歌をも加えて、これら拾遺抄の二首に古今六帖の一首を加え「三首とも遠方から都を、とくに『拾遺抄』の二首は都の「いも」を意識しての作」とし、「三首がいずれも『萬葉集』の乙麻呂歌ではなく、平安朝において独自に結びつけられた歌ということは、遅くとも十世紀後半ごろ、史実の配流を踏まえるかのような、乙麻呂の説話が存した可能性は低くない。配流を核とした乙麻呂のコンテキストが形成されていたように思われる。」と記しておられるが、このように考えないことには、乙麻呂という作者名表記と、離れている女性を思っているような和歌が組み合わされていることの説明がつかないことになる。

公任が拾遺抄を編纂したとして、公任もこのような歌語りをも利用していて、この乙麻呂、そして奈良の帝とともにいた人麿の和歌なども人麿詠と認識していたことが窺えるのである。

六、結び

万葉集で活躍した柿本人麻呂は、平安時代には、奈良の帝とともに和歌を詠み、多くの和歌を遺したことになるが、人麿集の和歌は、おそらく後撰集編纂とともに行なわれた万葉集読解作業で生み出された万葉集の和歌の一部が人麿の和歌として家集が作られ、一方で伝承された歌語りの和歌も人麿の和歌として伝えられ、結果的に、万葉集の人麻呂とはかけ離れた歌人像が作り出されるのである。

拾遺抄までとしたが、拾遺集は、さらに多くの人麿歌が入集する。入集歌は貫之の一〇七首に次ぐ一〇三首で、三番目に歌の多い凡河内躬恒の二四首を大きく上回るのだが、そこにはあり得ないような人麿像が造り出されている。

もろこしにて　　柿本人麿

353　あまとぶやかりのつかひにいつしかもならのみやこにことづてやらん

もろこしへつかはしける時よめる　（人まろ）

478　ゆふされば衣手さむしわぎもこがときあらひ衣行きてはやきむ

これらは、遣唐使となって唐に行ったという伝承である。先に拾遺抄二九七番歌に触れたが、遣新羅大使の和歌が人麿の作という伝承からさらに広がっていくのである。拾遺集には、万葉集から採ったと思われる和歌の他に、さらに人麿集や不思議な伝承歌をも採り入れているのである。

現代では、信じられないような現象であるが、平安時代の人麿像は、万葉集の実像とは異なった伝承の中の人麿像として創り出されているのである。

注

（1）『柿本人麿異聞』（和泉書院・二〇〇三・一〇刊）なお、大久間喜一郎氏「平安以降の人麻呂」（『人麻呂を考える』（上代文学会編・笠間書院・一九八六・六刊）所収）も、ほぼ同様の内容が触れられている。

（2）以下、引用する文、和歌本文は『新編国歌大観』を用いた。

（3）『古今和歌集以後』（和泉書院・二〇〇〇・一〇刊）

（4）現存する人麿集は、五系統に分類されていて、所収歌がそれぞれ相違するが、各系統ごとに和歌の有無、本文の異同を記していくと、煩雑になるので、五系統全体をさすことにしているが、歌仙歌集本と西本願寺本の人麿集をほぼ念頭においている。

（5）『人麿の歌集とその成立』（至文堂・一九六一・一〇刊）
（6）『拾遺抄注釈』（笠間書院・二〇一四・九刊）以下、竹鼻氏の引用は、この本による。
（7）『和歌文学大辞典』（古典ライブラリー・二〇一四・一二刊）
（8）「平安時代全注記における「萬葉歌人」の像　―赤人・有馬皇子・石上乙麻呂を例に―」『古代文学』６０号（二〇二〇）

（山形大学）